

# 0歳児の母親の育児困難感と母親の考え方

Child-Rearing Difficulties and Feelings among Mothers of 0 Year-old Infants

高田谷久美子<sup>1)</sup>, 佐野 まゆ<sup>2)</sup>

TAKATAYA Kumiko, SANNO Mayu

## 要 旨

女性の育児に対する価値や母親としての役割意識などが育児負担感に関係していると考えられる。そこで、本研究では、母親のとらえる育児の困難性を把握し、母親自身の育児や仕事に対する考え方とそれらの関連性について検討することとした。

0歳児の母親を対象とした育児雑誌の読者3394名を対象に、育児困難感、出産前後の性役割意識、仕事の有無、仕事役割と家庭役割の関係について自記式の質問紙調査を行った。

有効回答数は974名であった。回答者の平均年齢は31.1 ± 4.3歳、有職者(休職中含む)は296名、育児困難感ありと判断される母親は54名であった。育児困難感の有無には、育児が楽しい・辛いといった育児の考え方や経済状態、育児のストレスを積極的に解消しているか否かが影響していた。また、有職者では、育児困難感のある母親の方が家庭役割から仕事役割にネガティブに影響していた。以上から、母親の考え方が育児困難感に影響することが示唆された。

It is considered that the burdens of child rearing are affected with women's values of child rearing and consciousness of mother's role. The purpose of this study is to clarify the mother's difficulties in child rearing and to assess the relations with several factors like the attitudes towards child rearing and the presence or absence of a job.

The subjects were 3394 readers of a parenting magazine focusing on mothers of 0 years old of infants. The questionnaires on the feeling of child-rearing difficulties, changes of consciousness of mother's role between before and after childbirth, and work-family spillover were distributed by mail.

The valid responses were 974. Average age of these mothers was 31.1 (SD4.3) years old. Among of them 296 mothers were working and including on administrative leave. Fifty four mothers felt the child-rearing difficulties. The factors which related to the feeling of child-rearing difficulties were mother's attitude towards child rearing, economical satisfaction and stress release. In mothers having a job the feeling of child-rearing difficulties was affected the family to work spillover. Thus, it was suggested that the feeling of child-rearing difficulties of mothers was influenced by mother's view.

キーワード 育児困難感, 性役割意識, 0歳児の母親, 変化, スピルオーバー

Key Words Child-Rearing Difficulty, Consciousness of Sex-Role, Mothers of 0 Year Old Infants, Change, Spillover

受理日: 2013年2月1日

1) 山梨大学大学院医学工学総合研究部: Interdisciplinary Graduate School of Medicine and Engineering, University of Yamanashi

2) 全国健康保険協会山梨支部: Japan Health Insurance Association, Yamanashi Branch

## 1. はじめに

少子化の要因として女性の高学歴、晩婚化や非婚化、離婚の増加など生活環境や社会の意識の変化があげられている。さらに出産・育児にあまり喜びを感じられない女性が増えてきたことも注目されてきた。

育児を楽しみにしていたとしても、実際に子どもを前にして育児が始まると、楽しくない、苦しいばかり、あ

るいは悩みがつきないなどネガティブな感情が引き起こされてしまう。こうした母親の状況に対し、母親を取り巻く環境に着目しながら、母親の心理的負担を軽減しようとする育児不安について1980年代頃から、心理学、社会学、医学など様々な分野で行われてきた。その結果、育児不安や育児ストレスには夫との関係性、子どもへの否定的感情、母親役割の非受容感、ソーシャルサポートなど周囲の環境などが影響していることが指摘されている。しかし、分野における焦点等が異なるため統一性に欠けており、育児ストレスと混同している部分もみられてきた。このような中で川井ら<sup>1)</sup>は、育児不安の本態が育児困難感であることを明らかにし、児の年齢別の尺度を開発した。

一方、母親の就業形態が育児不安・育児ストレスに影響を与えることが知られているが、仕事と家庭をうまく両立している母親の方が、働いていない母親より育児に不安を抱えることが少ないともいう<sup>2)</sup>。しかし、働いている母親がすべてうまく両立できているわけではなく、多重役割の心理的な影響についての研究も進められてきている<sup>3)~5)</sup>。仕事と家庭の一方の役割で生じた状況や意識が他方の役割の状況や意識に影響を及ぼすことをスピルオーバーというが<sup>6)7)</sup>、ポジティブな影響であるにこしたことがない。両立できている母親はポジティブに影響し合っていると考えられる。

ところで、清水<sup>8)</sup>は女性の育児に対する価値や母親としてのあり方などの育児信念が育児ストレスと関係していると述べている。男女平等に固着するのではなく、子育て中は子どものためにと意識を変えられる母親であれば育児も楽しめるのではないだろうか。

本研究では、母親のとらえる育児の困難感の実態を把握し、母親役割、家庭や仕事などに対する母親の考え方や産前産後の母親役割に対する考え方の変化との関連性について検討することとした。なお、母親が育児と向き合い始めた時期に母親が変化していくと考え、0歳児を持つ母親を本研究では対象とすることとした。

## II. 方法

### 1. 調査方法と対象者

育児期の母親を対象とすべく、「赤ちゃんとママ」誌と契約を結んでいる健康保険組合の許可を得て、組合に所属する読者(0歳児の母親)3,394名に本研究の依頼文と質問紙を雑誌社に依頼し郵送した。記入済みの質問紙は、同封の返信封筒にて返送を求めた。

実施期間は2006年8月～10月末。

### 2. 質問項目

1) 対象者の属性:年齢, 職業の有無, 居住地域, 学歴, 子どもの数, 相談者の有無など。

2) 育児困難感:川井ら<sup>9)</sup>による子ども総研式・育児支援質問紙の「育児困難感I」(以下「育児困難」と略す),「夫・父親・家族機能の問題」(以下「家族機能」と略す),「母親の不安・抑うつ傾向」(以下「母親の不安」と略す),「夫の心身の不調」(以下「夫の不調」と略す),「Difficult Baby」の5領域を用いた。否定的な回答ほど高得点となる4段階評価尺度であるが、各領域の合計点は先行研究に基づき標準得点(以下SS得点)に換算され、それぞれの領域ごとに得点は異なるが、SS1:5パーセンタイル以下, SS2:6~30パーセンタイル, SS3:31~69パーセンタイル, SS4:70~94パーセンタイル, SS5:95パーセンタイル以上を示す。なお、本対象でのクロンバックの $\alpha$ 係数は、育児困難:0.868, 家族機能:0.938, 母親の不安:0.906, 夫の不調:0.861, Difficult Baby:0.858であった。

3) 出産前後の性役割意識の変化:性役割意識として、①男性は外で働き、女性は家の中で家事や育児をして働く男性を支えた方が良い(以下「男は外、女は家」と略す)、②男性でも女性でも働きたい方のいずれかが働き、もう一方が家庭を守ると良い(以下「男女いずれか」と略す)、③男性も女性も同じように働き、家事・育児も平等に分担すると良い(以下「平等に分担」と略す)、④その他(自由記載)の4項目を挙げ、出産の前後における自身の考えに最も近い意見を尋ねた。なお、①の「男は外、女は家」を伝統的、③をその反対、②を中間の考え方とした。また、考えが変化し(しない)要因を、出産、育児が楽しい、育児が辛い、仕事が楽しい、仕事が辛い、家事が楽しい、家事が辛い、仕事と家事の両立が大変、仕事と家事の両立がなんとかできている、自己実現、「三歳児神話」を信じる、育児にお金がかかる、暇をもてあます、その他の14項目の語群から選択(複数回答可)することとした。このとき、変化し(しない)かは出産前後の回答から判断した。

4) 仕事役割と家庭役割間の関係:小泉<sup>10)</sup>によって作成された、仕事と家庭のスピルオーバー尺度を使用した。スピルオーバーとは一方の役割における状況や経験が、他方の役割における状況や経験にも影響を及ぼすことをいい、仕事役割と家庭役割間における相互の影響をネガティブ、ポジティブの両面から測定するもので、①家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー(以下「家庭から仕事NS」と略す)6項目、②家庭と仕事の両役割間のポジティブ・スピルオーバー(以下「家庭と仕事PS」と略す)6項目、③仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー(以下「仕事から家庭NS」と略す)6

項目、計18項目である。5段階評価法で、合計得点が高いほどスピルオーバーが大きかった事を表す。なお、本対象でのクロンバックの $\alpha$ 係数は0.751であった。

### 3. 倫理的配慮

回答は匿名とし、調査内容、個人情報の取り扱いについて、山梨大学医学部の倫理委員会審査を受け承認を得た(No.293)。

### 4. 統計的解析

統計処理はPASW Statistics 17を用い記述統計を行い、分布の適合度には $\chi^2$ 検定、順位尺度の相関の検定にはSpearmanの順位相関係数を求め、中央値の比較の検定において2群はMann-Whitney検定、3群以上はKruskal-Wallis検定を用いた。有意水準は5%未満とした。

## III. 結果

1,020名の読者から回答が得られた(回収率:30.1%)が、このうち、育児困難感全領域に回答があったもののみ有効回答とした。有効回答数は974名であった。対象者についての年齢、子どもの数、職業の有無などの属性は表1に示した。

育児困難感の標準得点を、育児困難の標準得点別に算出した結果を図1に示した。育児困難がSS5にランクされた母親は、他の領域もいずれも高かった。ちなみに、育児困難の標準得点の分布は、SS1:0%、SS2:3.9%、SS3:19.8%、SS4:34.2%、SS5:42.1%であった。なお、各領域で否定的回答に「はい」あるいは「ややはい」と回答した項目のうち、上位3項目は、育児困難:「育児についていろいろな心配ごとがある(65.5%)」「どのようにしつけたらいいかわからない(43.9%)」「子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む(37.8%)」、家族機能:「夫と話し合う時間が少ない(64.2%)」「夫は子育ての大変さな

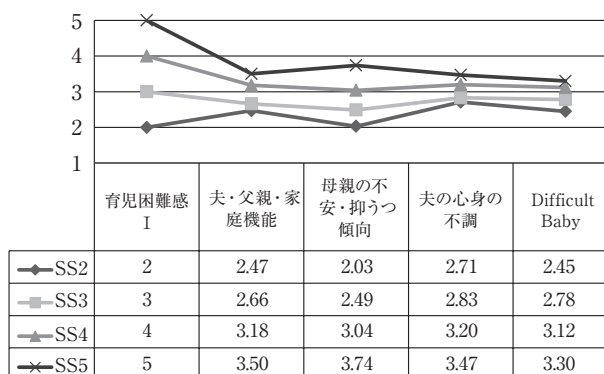


図1 育児困難感と他の成分とのプロフィール

表1 対象者の属性

n=974

年齢(歳)	平均(SD)	31.1	(4.3)
～19		3	0.3%
20～29		349	35.8%
30～39		591	60.7%
40～		25	2.6%
不明		6	0.6%
調査時点での職業の有無	あり	147	15.1%
	常勤	90	61.2%
	パート	57	38.8%
	あり(休職中)	149	15.3%
	復帰予定	114	76.5%
	予定なし	30	20.1%
	不明	5	3.4%
	なし	676	69.4%
	不明	2	0.2%
居住地域	北海道	15	1.5%
	東北	32	3.3%
	関東	308	31.6%
	中部	211	21.7%
	近畿	172	17.7%
	中国	51	5.2%
	四国	16	1.6%
	九州	79	8.1%
	沖縄	7	0.7%
	不明	83	8.5%
学歴	中学・高校・専門学校卒	453	46.5%
	中学卒	18	4.0%
	高校卒	274	60.5%
	専門学校卒	161	35.5%
	短大卒以上	501	51.4%
	短大卒	274	54.7%
	大学卒	220	43.9%
	大学院卒	7	1.4%
	その他	14	1.4%
	不明	6	0.6%
子どもの数(人)	平均(SD)	1.6	(0.8)
	1人	544	55.9%
	2人	323	33.2%
	3人以上	107	10.9%
日中の主な保育者	あなた自身	851	87.4%
	配偶者	14	1.4%
	保育所	61	6.3%
	その他	29	3.0%
	不明	19	2.0%
経済状態	満足している	452	46.4%
	どちらでもない	132	13.6%
	不満である	309	31.7%
	不明	81	8.3%
生活の中心	育児	682	70.0%
	仕事	49	5.1%
	その他	12	1.2%
	不明	231	23.7%
ストレス解消やリフレッシュのために積極的に何かをしている	はい	489	50.2%
	いいえ	318	32.7%
	不明	167	17.1%

表2 出産前後での性役割に対する考え方の比較

n=783

出産前\出産後	男性は外で働き 女性は家の中	男性でも女性でも 働きたい方	男性も女性も 平等に分担	その他	計	p 値
男性は外で働き, 女性は家の中で家事 や育児をして働く男性を支えると良い	159 (62.4) (52.8)	12 (4.7) (14.3)	68 (26.7) (20.4)	16 (6.3) (25.0)	255 (100.0) (32.6)	0.000
男性でも女性でも働きたい方いずれか が働き, もう一方が家庭を守ると良い	19 (30.6) (6.3)	34 (54.8) (40.5)	8 (12.9) (2.4)	1 (1.6) (1.6)	62 (100.0) (7.9)	
男性も女性も同じように働き, 家事・ 育児も平等に分担すると良い	120 (27.5) (39.9)	38 (8.7) (45.2)	258 (59.0) (77.2)	21 (4.8) (32.8)	437 (100.0) (55.8)	
その他	3 (10.3) (1.0)	0 (0.0) (0.0)	0 (0.0) (0.0)	26 (89.7) (40.6)	29 (100.0) (3.7)	
計	301 (38.4) (100.0)	84 (10.7) (100.0)	334 (42.7) (100.0)	64 (8.2) (100.0)	783 (100.0) (100.0)	

注1) 上段の( )内の数字はそれぞれの行に占める割合(%), 下段の( )内の数字は列に占める割合(% )を表す

注2)  $\chi^2$  検定を用いた

ど私の苦勞をわかっていない(38.9%)」「家庭内に関する事柄について夫には期待できない(37.4%)」, 母親の不安: 「おこりっぽい(59.7%)」「楽天的でよくよ考えない(51.9%)」「イライラしている(46.1%)」, 夫の不調: 「精神的にゆとりがない(27.4%)」「イライラしている(20.7%)」「精神的に不調である(17.9%)」, Difficult Baby: 「一晩に何回も起こされる(52.8%)」「おとなしく手がかからない(逆)(48.6%)」「抱っこや外に連れ出すなど眠るまでに手がかかる(40.1%)」であった。

性役割意識では, 出産前後で回答のあった者(783名)のみで, 出産前後の比較をした結果を表2に示した。「男は外, 女は家」であった者255名のうち, 出産後に68名が「平等に分担」と変化していた。一方, 出産前に「平等に分担」であった者437名のうち120名が「男は外, 女は家」に変化し, 結果として出産前に比し出産後では「平等に分担」は334名に減り, 「男は外, 女は家」は301名と

増加した。

変化した, あるいは変化しなかった要因を図2に示した。変化した方が多かった要因の中での最多は「出産」, 逆に変化しなかった方が多かった要因の中での最多は「育児が楽しい」であった。次に, 要因ごとに変化した方向性, 即ち, より伝統的になったのか, あるいはその逆かをみたとところ, 「仕事と家庭の両立が大変」「仕事が辛い」「三歳児神話を信じる」「育児が楽しい」「出産」「家事が楽しい」ではより伝統的に, 「仕事と家庭の両立が何とかできている」「暇をもてあます」「育児にお金がかかる」「自己実現」「仕事が楽しい」「家事が辛い」「育児が辛い」では伝統的とは逆の方向に変化する者が多かった。

有職者のスピルオーバーにおいて, 全18項目に回答があったのは230名であった。その中央値は, ①家庭から仕事 NS:15.0, ②家庭と仕事 PS:21.0, ③仕事から家庭 NS:18.0であった。職業の形態が常勤であるのか, パートか, あるいは休職中であるかによって①家庭から仕事 NS(常勤:14.0, パート:14.0, 休職:17.0) (p=0.006), 及び③仕事から家庭 NS(常勤:18.0, パート:15.0, 休職:19.0) (p ≤ 0.000)において有意差が認められ, いずれも休職者が最も高得点であった。

次に, 育児困難感のある母親を子ども総研式・育児支援質問紙の利用手引き<sup>9)</sup>に示されている面接対象となる基準(育児困難 = SS5, 他の4領域 ≥ SS4)に合致した母親として算出したところ, 育児困難感のある母親は54名(5.5%)であった。そこで育児困難感の有無別に属性や意識変化等の項目との関連をみたが, その結果関連のみられた項目を表3に示した。育児困難感のある母親の方がそうでない母親に比し少なかったのは, 「育児が楽しい」で変化した者, 逆に多かったのは, 「育児が辛い」と「仕事と家庭の両立が何とかできている」では変化した者, また, 経済状態は不満足な者, 積極的にストレス解消などできていない者であった。

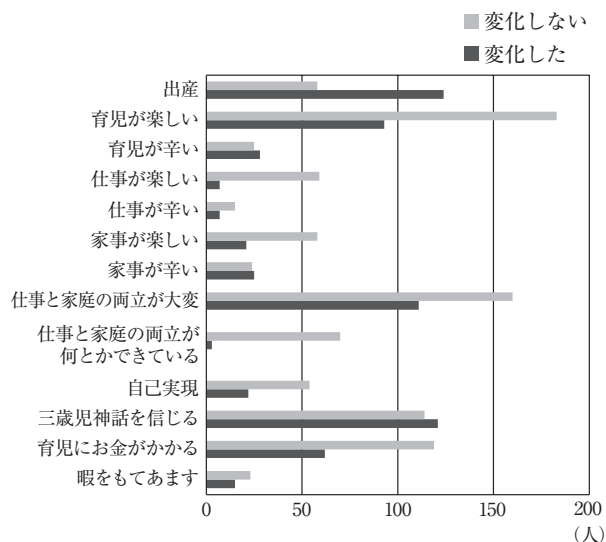


図2 出産前後で性役割が変化した・しなかった要因

表3 育児困難感の有無別に関連のみられた項目

	育児困難感あり	育児困難感なし	p 値
性役割が変化した・変化しなかった要因：育児が楽しい			
変化した	9 (17.3%)	364 (41.6%)	0.001
変化しなかった	43 (82.7%)	511 (58.4%)	
性役割が変化した・変化しなかった要因：育児が辛い			
変化した	17 (32.7%)	52 (5.9%)	0.000
変化しなかった	35 (67.3%)	823 (94.1%)	
性役割が変化した・変化しなかった要因：仕事と家庭の両立が何とかできている			
変化した	0 (0%)	81 (9.3%)	0.028
変化しなかった	52 (100.0%)	794 (90.7%)	
経済状態			
満足	13 (25.5%)	439 (52.1%)	0.001
どちらともいえない	10 (19.6%)	122 (14.5%)	
不満足	28 (54.9%)	281 (33.4%)	
ストレス解消やリフレッシュのために積極的に何かをしている			
はい	17 (38.6%)	472 (61.9%)	0.002
いいえ	27 (61.4%)	291 (38.1%)	

$\chi^2$  検定を用いた

さらに、有職者においてこれら育児困難感の有無とスピルオーバーについてみたところ、有意差のみられたのは①家庭から仕事 NS と②家庭と仕事 PS で、①では育児困難感のない母親 (197名) の中央値は 15.0、ある母親 (9名) では 17.0 ( $p=0.032$ )、②では同様にない母親 21.0、ある母親 17.0 ( $p=0.013$ ) であった。

#### IV. 考察

本対象における育児困難感 SS5 に分類される母親が 42.1% と高く、小林ら<sup>11)</sup> の 1～2 か月児の母親を対象とした結果 (40.3%) と類似している。これを、小林ら<sup>11)</sup> は、1～2 か月児の母親の特徴としており、さらに、子育てに自信がない、精神的な不調、子どもの扱いにくさを感じている母親が 2～3 割は存在することも同時に特徴としてあげている。本対象は 0 歳児を育てている母親ということで、児の年齢は特に聞いてはいない。しかし、「育児についていろいろな心配ごとがある」や「どのようにしつけたらいいかわからない」母親が多く、子育ての自信のないことが伺える。また、一晩に何回も起きなければならない、育児に手がかかるといった状況にも関わらず、夫の理解がない、夫と話し合えないなどと感じている母親が多い。こうした状況が母親の「おこりっぽさ」や「イライラ感」を生じているのかもしれない。

次に、性役割についての考えを見ると、出産前後で異なることが明らかとなった。即ち、出産前に「男性も女性も平等に分担」あるいは「男性でも女性でも働きたい方が働く」と考えていても、出産を契機に、仕事と家庭の両立が大変といった現実や、育児や家事の楽しさ、あるいは三歳児神話を信じるなどの理由により、より伝統的

な考えに移行していつている。また、出産前に「男性は外で働き女性は家の中」と伝統的な考え方をしていた者は、暇をもてあます、育児に金がかかる、家事や育児が辛いといった理由から、考え方が変化している。

さらに、育児困難感のある母親の特徴をみると、経済状態以外にこうした考え方の変化も影響しており、育児困難感のある母親では、育児を楽しみよりは辛いと考えるようになっていた。ちなみに育児が楽しい方に変化する母親は、より伝統的な性役割観に変化しており、育児が辛い方に変化する母親では伝統的とは逆な方向に変化していた。一方、育児で感じたストレスを積極的に解消あるいはリフレッシュするすべを持っている母親は、育児困難感のない母親の方に多かったことから、母親の育児に対する考え方や育児ストレスをうまく発散できることが育児困難感を変化させることができると考えられる。

最後に、有職者にとって家庭と仕事とがどのような影響しあっているかについてみる。一般に、女性が仕事と家庭を両立するのは女性の負担が大きく困難と考えられている。女性が出産前に仕事を辞める理由は「自分の手で子育てがしたかった (53.6%)」に続き、「両立の自信がなかった (32.8%)」が第 2 位となっている<sup>12)</sup>。佐々木ら<sup>13)</sup> も、保育園児を持つ母親の調査から、有職者の仕事と育児の両立困難には心身の負担感があることを指摘している。しかし一方で、仕事と育児の両立に関する意識として、「気分転換ができ、育児も仕事も充実する」といった気分転換があるとされている。

育児と仕事とが相互に影響を与えていることをスピルオーバーといい、それに関する研究がなされており、否定的な方が多いが、肯定的な影響についても指摘されるようになってきている<sup>14)15)</sup>。いずれも精神的なストレス

を解消するというものである。本研究において有職者のスピルオーバーを検討したところ、仕事、家庭いずれの方向にもネガティブに働いており、休職者が最も高く、常勤、パートとなっていた。パートの場合、時間的な余裕があるためそれほど強い影響が出ないと考えられる。休職者が最も高いのは、もともとうまくできそうもない、あるいは専念したいという者が休職しているためと考えられる。ところで、小泉ら<sup>16)</sup>は、仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーへの影響について、抑うつ、夫婦関係、子育てストレスを従属変数として2要因分散分析を行ったところ、抑うつのみが主効果として有意であったとしている。本研究では、育児困難感のある母親の方がそうでない母親よりも、家庭から仕事NSが高く、逆に家庭と仕事PSは低いという結果であった。このことから、育児と仕事は相互に良い影響を与えている状況では育児困難感は少なくなり、母親自身の精神的に良い状態になるが、逆では悪い影響を与えると見える。

以上、母親の育児困難感は母親自身の育児をはじめとする母親役割などに対する考え方により影響されることが示唆された。

## V. まとめ

0歳児の母親を対象として、子ども総研式・育児支援質問紙(川井)を使い母親のとらえる育児の困難感を明らかにした上で、母親役割、家庭や仕事などに対する母親の考え方と産前産後における考え方の変化についてとの関連について検討した。

1. 育児困難感が最も高いSS5に分類される母親は42.1%で、これらの母親は他の4領域も最も高かった。また、「育児困難感あり」と分類される母親は5.5%であった。
2. 性役割意識では、出産前の「男は外、女は家」が32.6%、「平等に分担」が55.8%だったのが、出産後、前者は38.4%と増加し、後者は42.7%と減少し、より伝統的に変化した。
3. 育児困難感の有無には、育児が楽しい・辛いといった育児の考え方や経済状態、育児のストレスを積極的に解消しているか否かが影響していた。
4. 有職者のみにおいて、育児困難感の有無別にスピルオーバー得点の比較をしたところ、育児困難感のある母親の方がそうでない母親よりも有意に「家庭から仕事NS」が高く、「家庭と仕事PS」は低かった。

## 謝辞

本調査にご協力くださいましたお母様方、また調査の実施にあたりご協力いただきました赤ちゃんとママ社編

集部のみなさまに深謝いたします。

## 引用文献

- 1) 川井尚, 庄司順一, 他(2000) 育児不安に関する臨床的研究—子ども総研式・育児支援質問紙(試案)の臨床的有用性に関する研究. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 36: 117-138.
- 2) 柏木恵子(2008) 子どもが育つ条件—家族心理学から考える. 岩波新書, 東京.
- 3) 福丸由佳(2000) 共働き夫婦世帯における多重役割と抑うつとの関連. 家族心理学研究, 14(2): 151-162.
- 4) 小泉智恵, 菅原ますみ, 他(2003) 働く母親における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー: 抑うつ, 夫婦関係, 子育てのストレスに及ぼす影響. 精神保健研究, 47: 67-75.
- 5) Barnet RC, Hyde JS (2001) Women, men, work, and family: An Expansionist Theory. American Psychologist, 56(10): 781-796.
- 6) Crouter AC (1984) Spillover from family to work: The neglected side of the work-family interface. Human Relations, 37: 425-441.
- 7) 小泉智恵(1997) 仕事と家庭の多重役割が心理的側面に及ぼす影響: 展望. 母子研究, 18: 42-59.
- 8) 清水嘉子(2003) 母親の育児に対する信念と育児ストレスの関係. 小児保健研究, 62(5): 558-568.
- 9) 川井尚, 庄司順一, 他(2001) 子ども総研式・育児支援質問紙(ミレニアム版)の手引きの作成. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 37: 159-180.
- 10) 小泉智恵(1999) 働く母親における職業と家庭の多重役割—その規定要因と精神的健康への影響—. 博士論文(未公開). 白百合女子大学, 東京.
- 11) 小林康江, 遠藤俊子, 他(2006) 1カ月の子どもを育てる母親の育児困難感. 山梨大学看護学会誌, 5(1): 9-16.
- 12) 総理府(2006) 平成18年版国民生活白書. ぎょうせい.
- 13) 佐々木綾子, 田邊美智子, 他(2000) 母親の育児支援に関する基礎的研究(1)—保育園児を持つ母親の育児環境および仕事と育児の両立に関する意識—. 福井医科大学研究雑誌, 1(3): 427-445.
- 14) Grzywacz JG, Almedia DA, McDonald DA (2002) Work-family spillover and daily reports of work and family stress in the adult labor force. Family Relations, 51(1): 28-36.
- 15) Hammer LB, Cullen JC, Neal MB, et al.(2005) The longitudinal effects of work-family conflict and positive spillover on depressive symptoms among dual-earner couples. Journal of Occupational Health Psychology, 10(2): 138-154.
- 16) 小泉智恵, 菅原ますみ, 他(2001) 児童を持つ共働き夫婦における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー: 抑うつ, 夫婦関係, 子育てストレスに及ぼす影響. 精神保健研究, 47: 65-75.